

マンスフィールドにおける「意識の流れ」の 手法について

——「ブリル嬢」を中心に——

水田 圭子

キャサリン・マンスフィールドの「ブリル嬢」(‘Miss Brill’)は1920年11月に発表されている。周知のように、1920年代は、「意識の流れ」の手法を取り入れた作品が盛んな時代であった。「意識の流れ」という用語は「思想の流れ」について話した哲学者ウィリアム・ジェームズが元になっている。¹⁾1922年にはジョイスの『ユリシーズ』、1925年にはウルフの『ダロウェイ夫人』が発表されている。短篇「ブリル嬢」においても、この手法がみられるので以下それを明らかにして行きたい。

ロバート・ハンフリーは『現代小説の意識の流れ』²⁾において、ジョイス、V. ウルフ、ドロシー・リチャードソン、フォークナーの小説を論じている。その中で、「意識の流れ」の技法を「直接内的独白」(direct interior monologue)、「間接内的独白」(indirect interior monologue)、「全知作者の叙述」(description of omniscient author)、「ソリロキー」(soliloquy)の四種類に分類している。

「直接内的独白」というのは、作者は姿を消し、一人称が用いられ、その人物は、自分の内部に向けて語りかけるだけである。「間接内的独白」は、作者が常に存在し、三人称で語られる。「全知作者の叙述」では、全知の作者が在来の叙述の方法で作中人物の心情を描く。「ソリロキー」は、独白に比べて、論理が通っていて、作品中に直接の聞き手を想定している。

ところでキャサリン・マンスフィールドは人物の心理描写に興味を示した作家であるが、彼女がおもに使う技法は、ハンフリーの分類に従うならば「間接内的独白」と「全知作者の叙述」であるといえる。もともとこの二つが関連しあって使われる性質のものであることはわかるのであるが、

マンスフィールドの場合、その二つの技法を統合するためにイメージが効果的に用いられる。結論を先に言うことが許されるならば、このことがじつはマンスフィールドの心理描写の特徴（すぐなくとも、特徴のひとつ）と思われる。

こうした二技法により表わさんとした主題とまたイメージは深く関わっている。そこで、まず、この短篇の内容は、ある日曜日の午後、毛皮のえり巻をつけたブリル嬢が、いつも日曜日はそうするように、公園にでかけてそこで聞いたり見たりしているうちに人生についての啓示をえて、楽しくなるが、その幸福感もすぐ破られ悲しみに変る、というのである。そして主題は、人生は劇であり、われわれ一人一人は役者であるという啓示をえた至福がすぐ破られ、人生は悲しいものであるというより深い知覚への発展を描くことにある。

「ブリル嬢」におけるイメージの特徴は、白とか純粋に関するものが多い。また、ここに登場する人々は、孤独な者と、二人連れ、あるいはグループに分けられる。以上は皆主題に関係がある。まず、イメージであるが、冒頭の一節では、‘like white wine’³⁾ ‘like a chill from a glass of iced water before you sip’⁴⁾ 等は「白」を暗示する。また ‘the moth - powder’⁵⁾ の powder の白さ、などがある。また、公園でブリル嬢が目の前を通る人々を観察している節では、‘a cold, pale nun’⁶⁾ の nun は、世間と隔たった孤立の世界、汚れのなさを表わしている。また同じ節で、‘an ermine toque’⁷⁾ がでてくるが、その ermine は、冬は白い色をしており、また O. E. D. によると「詩でしばしば純粋無垢の象徴として言及される」とある。また若い男女の会話に出る ‘like a fried whiting’⁸⁾ も白を暗示する。最後の節に二度出る ‘the baker’s’⁹⁾ は粉の白さを暗示している。

このように「白」のイメージは最初から最後まで出ている。「白」は、W・ペイターの『享楽主義者メアリアス』にもでてくる ‘a white bird’¹⁰⁾

の意味を暗示させる。すなわち、Brewer's *Dictionary of Phrase and Fable* (Centenary Edition, 1970, p. 1152) によると、white bird は「良心、または人間の魂」とある。「白」は人間の心に関わる語であり、この短篇の主題の悲しみも純粹に心的現象である。それで、この「白」は短篇の終末の悲しみを表わす色なのである。

また 'the moth-powder'⁵⁾ であるが、これは、衣類を保存するための虫よけの粉である。ブリル嬢は、箱のふたをあけて、しまっていた毛皮のえり巻を取り出し、虫よけの粉を払ったとある。これは、このえり巻が古いものであること、それは閉じこめられてじっとしていたことなどを暗示する。こうした箇所は全知作者により語られるが、それが間接内的独白に変わって、ブリル嬢が毛皮のえり巻の鼻がしっかりしていないと思うところがある。少し壊れたところがあっても修理して使おうとする気持がわかり、えり巻も立派なものではないこと、彼女もあまり若くない女の人と想像がつく。いずれにせよ、'the moth-powder'⁵⁾ の moth は、はかなさをも象徴している。ブリル嬢が公園で通る人を眺めていて、楽しくなり啓示をえた幸福な気持がすぐさま、若者たちにより壊されてしまう、その幸福感のはかなさを予言している。先にあげた a nun にも O. E. D. によると moth の一種という意味もあるが、moth は、*psyche* (靈魂、精神) を人格化したプシュケは蝶の姿をもとるので、これと同形、従って、人間の心的働きを描くこの作品にふさわしいイメージである。また蛾や蝶は、元の姿から変身してきたのである。それで、ブリル嬢の大切な毛皮のえり巻が箱から出されるまでじっとそこに閉じこめられていたことは、静止状態stagnantの蛹cocoonの時代を思わせる。また毛皮のえり巻はブリル嬢の分身のようなものだが、ブリル嬢自身も最後の節にあるように「小さな暗い部屋——戸棚のような彼女の部屋」¹¹⁾ に蛹cocoonのようにじつと内部にこもっているのである。それで、閉じこもっていた世界から外へ出た蛾や蝶の運命がはかないように、ブリル嬢のえた至福の気持も長く続かないことを最初から作者が

暗示している。毛皮のえり巻が若者たちから悪く言われ、箱から出した時の悲しげな目が本当に最後には泣き出し、また箱にしまわれてしまうので、ブリル嬢とえり巻は同じ運命にある。はかなさはまた、‘the red eider-down’¹²⁾ の羽根ぶとんの羽根の軽やかさ、たよりない感じによっても暗示される。その他同じ冒頭の節の間接内的独白内に出る ‘black sealing-wax’¹³⁾ もちょっと不吉な感じがある。このようなはかなさは、悲しみに通じるものである。

それで悲しみを表わす「白」は、はかなさ、純粹を表わすが、また孤独をも表わすといえる。先に、この作品に登場する人々は、孤独な者と、二人連れ、あるいはグループに分けられると言ったが、その点をみたい。まず表題の「ミス・ブリル」のミスは一人者である。この作品であと孤独の人は、先にあげた a nun だけである。彼女は一人で公園の群集の中を通り、多くの二人連れやグループの間に登場する貴重な存在である。彼女の表わす世界は世間から隔たった孤立した世界である。他に人間以外では、冒頭の節で時折「葉が一枚」¹⁴⁾ 空から舞い降りたとあり、この葉は孤独な存在である。

次に、これに対応する側をみると、冒頭の孤独と「白」の節の後は各節が二人連れ、あるいはその他を表わしている。まず楽隊、次に、ブリル嬢のベンチの横に座った老夫妻、また先週隣りに座ったイギリス人の夫妻を回想すること、次に、公園内の群集、また風景もいろいろな物によってままとまっていること、楽隊の音、また二組の男女、二人連れの農家の女、また数頭のロバ、次に、先にあげた尼僧が通るのであるが、また美しい女と男の子、白テンのトーク（つばのない婦人帽）をかぶった女と紳士、足を引きずる老人と並んで歩く四人の女、ブリル嬢に新聞を読んでもらう病弱な老人、公園にいる人全体による合唱という考え、若い愛し合っている男女等がある。また直喩では、‘like a rooster’¹⁵⁾ があると、別の節では ‘like a young hen’¹⁶⁾ があり、合わせてペアになる。

こうした外的な対立的な環境を設定しておいて、暗示にとどめられ（作者は、sad や sadness を二箇所を出しては否定してしまう）、ブリル嬢が気づいていなかった悲しみは、冷ややかな言葉を吐いた若い男女が隣りに坐ったことで表面化する。ブリル嬢のえた至福は破られ、最後の節では、暗い戸棚のような自分の部屋にもどって孤りで悲しみにくれる。このように孤独と悲しみは結びついている。傷ついた心は、ちようど蛹まぶたにもどったかのように一人で耐えるのである。しかしこうして耐えることにより、次の時には、より美しい蝶として、悲しみに耐えた人間として生まれ変わるのではないだろうか。また、とかく集団を好みがちであるが、このように一人で瞑想するようなことが大切であろう。

ブリル嬢は、啓示の喜びの後、人生は悲しみであるというより深い知覚へ到達するのであるが、これはブリル嬢が一人で悲しみに耐えることにより到達するので、このような純なる「白」の世界は悲しみを通した後えられる真の啓示の世界と言える。ブリル嬢がそこへ到達することを日々目標として生きているのであり、その人の内面を描いたのがこの短篇である。

以上、主として用いられている二技法に、イメージが、うまく織りまぜられ、それらに統一や調和を与えている。最後に同じ「意識の流れ」の手法で小説を書いたウルフの『ダロウェイ夫人』に比べると、孤独を扱う点では同じであるが、『ダロウェイ夫人』では、意識の連想が次から次へと広がって行ってしまうが、マンスフィールドでは、あくまでも一人物の心理に集中する。外界のものを一つ一つイメージとしてとらえて行くよりも一つをもって全体を暗示したり、代表的イメージにまとめて述べる。そこにマンスフィールドの特徴がある。また全知作者の叙述と間接内的独白が多いのは、まず彼女が伝統的な全知作者の叙述に従い、時々、新しい間接内的独白を取り入れたからである。直接内的独白がごく短く少ないのは、その独白が、やや冗舌になりがちで、不経済な長い文になりやすく、マンスフィールドのスピード感がある書き方や、主題に合わなかったからであ

ろう。また短篇の中に「意識の流れ」の手法を取り入れることにより、短篇を従来より生き生きとしたものにした点、彼女の大きな功績である。このような「意識の流れ」の手法を用いた彼女の他の作品としては現実と過去への回想をうまく織り混ぜた「パーカーおぼさんの生涯」(1921)、特に「流れ」のイメージを強調したものに「初めての舞踏会」(1921)などがある。

- 注) 1) George Sampson, *The Concise Cambridge History of English Literature* (Cambridge, 1970) p. 876.
- 2) Robert Humphrey, *Stream of Consciousness in The Modern Novel*, (Berkley, Los Angeles, London : University of California Press, 1954)
- 3) *Collected Stories of Katherine Mansfield* (Constable, 1959), p. 330.
- 4) *Ibid.*, p. 331.
- 5) *Ibid.*
- 6) *Ibid.*, p. 333.
- 7) *Ibid.*
- 8) *Ibid.*, p. 335.
- 9) *Ibid.*
- 10) Walter Pater, *Marius the Epicurean* vol. I (London, Macmillan, 1910), p. 22.
- 11) *Collected Stories of Katherine Mansfield*, p. 335.
- 12) *Ibid.*, p. 331.
- 13) *Ibid.*
- 14) *Ibid.*
- 15) *Ibid.*
- 16) *Ibid.*, p. 332.